
低体温症がほとんどという“想定外”

(由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.42-58)

2012年9月14日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

低体温患者がほとんどという“想定外”

今までの災害訓練では想定していなかった低体温症の患者が多く搬送された。自分で歩ける人もいたが、みなトリアージ班の前まで来るとへたりこんだ。その患者に対し衣服を脱がせ毛布、湯たんぽ、電気毛布、軍足などあらゆるもので体温を温めた。生死を分けたのは粉塵、下水を含む水が肺を侵す津波肺の有無だった。救急車のほとんどが走れない状態になっていた。

不眠不休の闘いがはじまる

地震発生から一晩明け、救急隊が搬送してくる傷病者の人数が増えた。また長岡赤十字病院や足利赤十字病院からのDMATも到着した。普段二、三人の患者を搬送してくる車やヘリにも十人を超える人がつめこまれた。また、人数が増えるにつれてトリアージ班の忙しさは激増した。トイレの場所を聞く人、言い争う人など本来の業務以外の仕事のためだ。いつもなら手助けしてくれる病院ボランティアも被災して駆けつけることができなかった。

巡回バスで病院と避難所を結ぶ

トリアージで緑と判断された人たちも帰宅困難者となり病院の内外で人があふれた。遠く離れた場所から搬送されて帰る道がわからない人がたくさんいたからだ。そこで病院の依頼で市が手配したバスによって帰宅困難者を自宅へ送り届けることにした。しかし追い出されることへの不安からブーイングも出た。それに対し食料をバスの中で配布するようにするなど、苦肉の策も迫られた。

ここは野戦病院か避難所か

雪がちらつく中、軽症者は外で治療した。中に入れてしまうと居座って帰らなくなるためである。それほど野戦病院の様相を呈しているにもかかわらずメディアの取材はなかった。この窮状を報道してほしいと願う者もいたが交通の寸断によって仙台在住の記者たちも石巻に入ることができなかったのである。

忘れ得ない記憶、強烈な体験

関わったそれぞれの人が印象的な体験をしている。目がよく見えないと訴えた五十代の男性の顔には無数のガラス片がささっていた。抗生剤が不足し切り傷を縫合した人のほぼ100%が化膿していた。亡くなった娘に謝り続ける母親の姿もあった。